01 品詞、文型

1 品詞

最初から、いかにも文法っぽくって、あんまり面白くないところで、こんなこと言っちゃいけないんですが、私もあんまり好きじゃないところなんです。すみません。

ですが、ある程度の文法用語は確認のため載せておきます。

英語の「文」とは、大文字で始まってピリオドやクエスチョン・マークなどまでを言いますが、その中にある最小の部分を「単語」といいます。

そして、その単語を文中での働きや意味によって分類したものを「品詞」といい、その品詞は右ページの Point 1 のように 10 種類に分類されています。

参考書によっては、冠詞を形容詞の一部と考え、また、助動詞を動詞の中に組み込んで、8 品詞としている場合もありますが、どちらでも構わないと私は思います。

それよりも大切なのは、一つの単語が一つの品詞になるとは限らないことです。たとえば、water は、みなさん知っての通り「水」で名詞ですが、

I want you to water the flower.

となると、どうでしょうか？この water は「～に水をやる」の意味の動詞です。英文の意味は「私はあなたに花に水をやってもらいたい。」です。

また、people は「人々」や「国民」という意味の名詞ですが、「～に人を住まわせる」などの動詞の意味もあります。e-mail には「E メール」という名詞の意味もありますが、「～に E メールを送る」という動詞の意味もあります。bed は名詞で「ベッド」、動詞で「～をはめ込む」です。

このように、日本語と違って、語順によって品詞の間をわりと自由に行き来するのが、英語の特徴でもあると言えるでしょう。語順が大切です。

まとめ note

1 品詞

Point 1

① 名　詞…人や物事の名前を表し、文の主語や補語、目的語になる。
② 代名詞…名詞の代わりに用いられ、名詞と同じく、文の主語、補語、目的語になる。
③ 冠　詞…名詞の前に置かれ、名詞が特定のものか、不特定のものかを区別する。
④ 形容詞…人やものごとの性質・状態・数量を表す。
⑤ 副　詞…動詞や形容詞、副詞、文を修飾して、様子・程度・場所・時などを表す。
⑥ 動　詞…主語の動作や状態を表す。
⑦ 助動詞…動詞の前に置かれ、話し手の判断や気持ちをつけ加える。
⑧ 前置詞…名詞や代名詞などの前に置かれ、後に続く語句とひとまとまりで他の語句を修飾し、時や場所・状況などを表す。
⑨ 接続詞…語と語、句と句、節と節、文と文を結び付ける。
⑩ 間投詞…驚きや喜びなどの話し手の感情や呼びかけなどを表す。

・参考・

句…主語と動詞を含まず、ひとかたまりの意味を表す 2 語以上のまとまり。
節…主語と動詞を含む、ひとかたまりの意味を表す 2 語以上のまとまり。

2 5 文型

中学・高校で習うのは 5 文型ですが、英文法学者の中では実は 7 文型や 8 文型が主流になっているようです。

人によっては 25 文型や 53 文型とする学者もいるようですので（あまり多すぎるとそれを覚えるだけで大変ですが）、学校で習う 5 文型が絶対ではないことは理解しておく必要があるでしょう。

また、この 5 文型では、「いつ、どこで、どのように」に当たる副詞（句）の部分は文の要素に含めず、5 文型を判断するときに考慮しませんので、複文（主節と従属節を含む文）や〈provide ～ with…〉などの熟語を含む英文を第何文型か？と議論することはあまり有益ではなくなります。

しかし、複雑な英文の主語・動詞・目的語・補語をそれぞれ把握して構文分析するのには、それなりに役立ちますので、理解しておくことは無駄ではありません。「単文」や「従属節」などの意味は Point 2（右ページ）のようになります。文法用語の最たるものですが、後々の単元の説明にも必要ですので、一応確認しておきましょう。

前置きはこれぐらいで、5 文型は、ざっと右ページの Point 1 のようになります。このあたり、ほんとに文法っぽくって、あんまり面白くないところなんですが、ひと通りの確認だと思って読み進めてください。

なお、主語は S（subject の略）、動詞は V（verb の略）、補語は C（complement の略）、目的語は O（object の略）で表され、この 4 つを「文の要素」といいます。その他は全て「修飾語（句）」に分類されます。

修飾語句は 5 文型を考えるときには無視してかまいません。

このような修飾語句になるのは、上で述べたように、だいたい、「いつ」「どこで」「どのように」を意味することばです。

特に、in the morning（午前中）とか at the station（駅で）などの前置詞句（前置詞を含む意味の上でひとかたまりの部分）があれば、これは修飾語句になりますので、こうした語句が英文中にあったら、それは除外して文型を考えましょう。

2 5 文型

Point 1

〔5 文型〕
第 1 文型 S ＋ V 〔主語＋動詞〕
第 2 文型 S ＋ V ＋ C 〔主語＋動詞＋補語〕
第 3 文型 S ＋ V ＋ O 〔主語＋動詞＋目的語〕
第 4 文型 S ＋ V ＋ O ＋ O 〔主語＋動詞＋目的語＋目的語〕
第 5 文型 S ＋ V ＋ O ＋ C 〔主語＋動詞＋目的語＋補語〕

〔文の要素〕
主語 S …「～は、～が」に当たる、文の中心になる語。
動詞 V …「～する、～です」など動作や状態を表す語。
補語 C …主語や目的語の性質や状態を表す語。
目的語 O …動詞が表す動作などの対象となる語。

Point 2

単文…主語＋動詞の組合せが 1 つだけの文。
複文…主語＋動詞の組合せが 2 つ以上あり、「主節」と「従属節」を含む文。
重文…主語＋動詞の組合せが 2 つ以上あり、それぞれが対等な関係でつながれている文。

主節…複文の中で意味の上で中心になる主語＋動詞を含む部分。
従属節…複文の中で主節を修飾する主語＋動詞を含む部分。

10 関係代名詞

1 関係代名詞の基本

「関係代名詞」というのは、右ページの Point 1 のようになりますが、大雑把にいうと名詞を修飾したり、補足説明したりする一つの方法です。

そして、関係代名詞によって修飾される名詞を「先行詞」といいますが、関係代名詞は、その先行詞の種類と関係代名詞が導く節の中での働きによって、Point 2 のように使い分けることになります。

あくまで「関係代名詞が導く節の中での働き」です。これをたまに、「英文全体での働き」と勘違いしていて、かなり混乱していた生徒がいましたが、決してそうではありません。極端に言えば、関係代名詞の使い分けは「関係代名詞と先行詞より前の英語の部分は関係ない」と理解しておいてもいいと思います。

では、先行詞が「人」の場合について見ていきましょう。
右ページの例文①〔主格〕は次の 2 文をつなげたものです。

①′ I have a friend.（私には友だちが一人います。）
先行詞

①″ He lives in Kyoto.（彼は京都に住んでいます。）
主格

① I have a friend who〔lives in Kyoto〕.
先行詞　主格

friend と He は同一人物なので、代名詞 He を関係代名詞 who にして、friend の後に置くと、who 以下の部分が friend を修飾することになります。

先行詞が「人」で、関係代名詞にする語が元の文で主語、つまり「主格」なら、関係代名詞は who が選択される、ということです。

まとめ note

1 関係代名詞の基本

Point 1

関係代名詞…2 つの文を関係づけてつなぐ働きと代名詞の役割を果たす。
先　行　詞…関係代名詞の前に置かれて修飾される名詞。

Point 2

〔先行詞と関係代名詞の格〕

先行詞	主　格	所有格	目的格
人	① who	② whose	③ whom (who)
人以外	④ which	⑤ whose / of which	⑥ which
人・人以外	⑦ that	——	⑧ that

次の 2 点でどの関係代名詞を使うか決まる。
(1) 先行詞が「人」か「人以外」か。
(2) 関係詞節の中でどのような働きか。

〔先行詞が「人」の関係代名詞〕

① I have a friend who lives in Kyoto.〔主格〕
（私には京都に住んでいる友だちが 1 人います。）

② She has a brother whose name is Tom.〔所有格〕
（彼女には、名前がトムという兄がいる。）

③ She is a singer whom I like.〔目的格〕
（彼女は私が好きな歌手だ。）

14 仮定法

1 仮定法過去

「仮定法」って、みんなが一番嫌いな奴じゃないでしょうか。

なんだかわかんない、っていう人が一杯います。私も高校生のときは、わかったようなわからないような感じでした。

しかし、考えてみると、ここがなかなかおもしろい。どこがおもしろいの？と思う人が多いと思いますが、ここが英文法の特にまだ発展途上のところじゃないかと思うのです。

私の考えは別にあるのですが、それは後にして、ともかく、今、高校などで教えている仮定法をひととおり述べます。

仮定法とは、大雑把に言えば、「事実ではない、またはまずあり得ないことを空想して述べる言い方」だということができますが、基本となる形には「仮定法過去」と「仮定法過去完了」の２つがあります。まず、この２つを理解しておくことが大切になります。

はじめに「仮定法過去」ですが、学校の英文法で教えている基本は右ページの Point 1 のようなものです。

If I knew his address, I could write to him.
（もし私が彼の住所を知っているなら、私は彼に手紙を書けるだろう。）

上の例文では、「実際には彼の住所を知らないので、手紙が書けない」というのが現在の事実です。この事実に反する空想が「仮定法過去」です。

名前は「仮定法過去」ですが、あくまで「現在の事実に反することや、未来のことでもまずあり得ないこと」を意味します。動詞の過去形を使っていることから、こんな名前になっていますが、ここがまずみんなが混乱しやすいところです。名が体を表していないと、やはり理解するのが大変なんです。

ちなみに、〈If ～〉の部分を「if 節」または「従属節」、後半の〈主語＋would など＋動詞原形…〉の部分を「主節」または「帰結節」といいます。If 節が be 動詞のときは、右ページ Point 2 のようになります。

まとめ note

1 仮定法過去

Point 1

仮定法過去…現在の事実に反することや、未来のことでもまずあり得ないことを想像して述べる表現。

〔仮定法過去の基本形〕

If ＋主語＋動詞過去形 ～, 主語＋ would ＋動詞原形…
should
could
might

〔意味〕「もし～なら、…だろう」（would, should のとき）
「もし～なら、…できるでしょう」（could のとき）
「もし～なら、…かもしれないだろう」（might のとき）

If I knew his address, I would write to him.〔現在の事実に反すること〕
（もし私が彼の住所を知っているなら、手紙を書くだろう。）

If I knew his address, I could write to him.〔現在の事実に反すること〕
（もし私が彼の住所を知っているなら、手紙を書けるだろう。）

What would you do if this house caught fire?〔まずあり得ないこと〕
（もしこの家が火事になったら、どうしますか。）

Point 2

If 節が be 動詞のときは were を使う。（口語では was もある。）

If I were you, I wouldn't do such a thing.
（もし私があなたなら、そんなことはしないだろう。）